

## 計画書と新特別基金

計画書に新特別基金の口数記載の欄がある。そこを見ると、それぞれの会の意識の度合いがわかる。

万が一の場合、いくらかかるか知ってるか？ 税金で飛ぶへりばかりじゃないぞ。

計画は守られるためにあるのだ、ということや、登山に「万が一」が起こりうることを考えられているかどうかは、登山者の想像力如何にかかっているんじゃないだろうか。

たぶん、ウチだけのことじゃなくて、みなさんのところでもよくあるハナシのような気がするのだが…。



山頂直下(南ア 鳳凰三山・地藏岳 2014年12月)

# 私の登山

11

## ワタシと登山

半田ファミリー山の会代表  
洞井 孝雄

どんな山がやりたいんだ？

れて死亡した仲間の遭対基金の更新がされておらず、期限が数日前に切れていたという事例、遭対基金ではなくスポーツ保険だけに入っていた人が低体温症による心疾患で死亡したが「低体温症は山岳事故ではないから」と保険金の支払いを拒まれた事例など、ほんのちよつと目を離れたスキに起きた不幸な事例をいくつも知っている。基金の口数から各山岳会、会員の安全に対する意識の問題が浮かび上がってくるのだが、それも計画書が提出されてわかることで、こういう場に出て、外からの指摘を受けようとする意識があっ

てはじめて可能になる。  
御嶽山の噴火以来、山域によって計画書提出を義務化する自治体が増えてきている。その主な使い道は、事故や



御嶽山で東海ブロック雪崩講習会(2015年1月)

災害が起きた場合に入山者を容易に特定するためだが、ネットやメディアでは、「事前に計画を見直し、安全な登山ができるようにすることも大きな意味を持っているよ」と強調されるようになってきた。

私たちは、山岳団体として計画を立てて計画書を書き、事前に「会(山行管理担当者)」に提出し、「チェック・見直し」というプロセスの中で、不備や不安定要素などがあれば、その内容を検討し練り直して山に出かけるという手順とルールを自分たちでつくってきた。当然のことながら、登山口ではその「計画書」を提出するが、その前にしっかりと計画を受け止め、いつ、誰が、どんな装備でどの山に入っているか、を把握した仲間たち(留守本部)が下山報告を待っていてくれる。安全な登山、安心な登山をすることができるシステムがすでに作られてきている。何十年も前から私たちが掲げてきた計画書の位置づけが、やっといま、登山者一般に訴えられるようになるところまでできている。

形式でも既成事実作りでもない

ただし、計画書は形式でもなければ、既成事実づくりの道具でもない。条例

「いったい、どう入るつもりだ？」

昨年の暮れ。合宿前に各会が計画書を持ち寄って、計画の不備や問題点を指摘しあうとともに、直近の山域事情などを共有して、より安全な合宿をめざす狙いで開かれる合宿遭対連絡会議(合宿期間が終われば遭対報告会議が開かれる)という長つたらしい会議の席上で思わず口走ってしまった。

「労山遭対基金」が「新特別基金」になって何年か経つ。正確には同じではないが、その基本的な精神や事故状況に応じた交付金の仕組みは遭対基金のそれを踏襲している。遭対基金は、

山岳事故による捜索・搬出費用が膨大な金額にのぼることから、仲間や残された家族などの負担を軽減するため、仲間同士が支えあいのお金を出しあい、プールしてきたことが始まりである。もとより、拠出金をプールしてもそれを使わないことが仲間の誇りであり、保険で言う「危険率」を度外視し、事故を起こさない(給付を受ける機会を作らない)努力と善意の蓄積によって現在のようない「基金」が形成されてきた。いわゆる「保険」とは違いますが、現実に事故が起きた場合の捜索・

救助にかかわる費用負担を軽減するために、この仕組みは私たちにとても大事なものだ。

で、話を元に戻すが、厳冬の北アルプスに入ろうとする会のメンバーの新特別基金の口数がほとんど5口になつていて、そのことを指摘した。事故が起きても、自分で全額負担できちゃうんなら遭対基金なんか要らないよな。形だけなら意味ないし、ほんとに必要になつたときは、これじゃ足りない。会でうるさく言うからこれくらい入つていい、っていう根拠はなんだろう。会で遭対基金の話ってされてるか？

はつきり答えは返つてこなかったけれど、自分たちだけは事故とは関係がない、と思つてはいないか、個々の「万が一」に対する意識はもろろん、山岳会の中でも誰も何も指摘しなかつたり、事故が起こつた場合にどう対応するか、ということが考えられていないんじゃないか、と思えちゃうのだ。ひよつとすると、横並びの口数の会員たちもそのあたりを会で教えてもらつていないのではないか、とも思えてくる。やはり、「どこへいくつもりか？」と訊かねばならない。

上から落ちてきた登山者に巻き込ま

で提出を義務づけされた計画書も、義務だからと、通り一遍の記入と提出はしても、実際には、その記入した内容と違う行動をしている意味がない。

ひるがえって、私たち山岳会の計画書はよりシビアな位置づけと運用が求められる。何よりも登山者自身が計画書の意味を理解していることが大事だ。今年の初めに富士山で起きた単独登山者の死亡事故では、計画では二合目までの日帰り登山だったのに、遺体が発見されたのは五合目付近だった、という。計画時点の引き返すポイントより上部の地点で発見されたという状況は何を物語るのだろうか。

あるパーティーがAというコースを登る計画を出したのにBというコース

を登つて下山してこない場合、まず探すのはAのコースである。Bのコースが探索されるのはかなり時間が経過してからだろう。入山したパーティーを万が一の際に把握できない計画では意味をなさない。「天候が悪い場合には上には行かない」と言いつつ、悪天にもかかわらず登つて、下降時に事故を起こしたパーティー、計画書とは異なる山域に転進して事故が起き、「無届ではない」と主張するリーダーなど、計画書の役割がどこかにいつてしまった例も枚挙にいとまがない。

新特別基金の口数も計画どおりの行動も、万が一の場合を想定できる想像力と安全に登山をしようとする意識にかかっている。

## HITO COCO

ヒトココは、電波を利用した登山者などの位置検知システムのひとつ。カード大の受信機(親機)と車のキーほどの大きさの発信器(子機)で、USB充電をすれば電池寿命は親機6か月、子機3か月、電波の飛距離は100m~5kmと仕様書にはある。親機1台につき子機20台まで登録して個別にその位置をサーチできるので、子どもや高齢者の保護などにはこれからもっと市場が広がるだろう。これを雪崩ビーコンや無線機かわりに埋没者の捜索やパーティー間の確認に利用しようとする動きもある。ビーコンや無線機より安価で軽量(ただし、機能には限界がある)なのも魅力だ。

昨年の春の合宿では合流するパーティーの位置を把握するのに使ってみた。

先日の東海ブロックの雪崩講習会に持参して仲間

にその使い方を説明した。

「この親機で、子機をサーチできる」

「子機はどこですか？」

「あっち。〇〇さんが持つてる」

「…ホライさん、それ逆じゃないんですか？」

「ばかやろう！」

捜されるはずの徘徊老人が親機を持っていてはおかしい、というのだ。結局、子機をポケットに入れて、親機を持った受講生にサーチされる役回りをさせられた。積もった雪の陰に隠れていたら、「発見しました」なんて声が聞こえてきて、町内を歩き回っている近未来の自分を想像すると、ちよつとどきどきしてしまつた。